

山本半右衛門家の角筆文献について (二)

鈴木 恵

一 はじめに

角筆文献とは、従来ほとんど一般には知られていなかった、角筆(かくひつ)という先を尖らせた箸のような筆記具を使って紙面を凹ませ、文字や記号・図画などを記した文献の謂いである。

佐渡市真野新町の山本半右衛門家・荏川文庫からも、角筆文献が発見されており、かつて本誌『佐渡郷土文化』第90号でも報告したことがある。ただ、当該報告は一九九八年九月二十七日、僅かに一日の調査に基づいたものであったが、その後同年一〇月二日、さらに二〇〇五年七月三十一日、八月四日、九月一七日、一〇月三十一日にも調査を実施し、新たな発見も幾つかあったので、この機会に追加報告させていただくこととした。

二 山本半右衛門家の角筆文献

山本半右衛門家・荏川文庫所蔵資料から発見された角筆文献は、次下の一三資料である。始めの六資料は前回報告ズミのものであるが再掲した。

各文献についての記事は、書名(外題を原則とする)に引き続いて、①員数、②書写または板行年時、③装丁、④寸法、⑤表紙色、⑥

郭の形態、⑦外題・内題・尾題・版心記、⑧刊記・奥書、⑨古印記、⑩伝来の書入、⑪副点の内容、⑫発見者・調査者と発見・調査年月日、の順に掲げてある。

(1) 『佐渡年代記』 ①全一三冊、②江戸時代・慶長五年(一

六〇〇)以降写か、③袋綴装冊子本(明朝綴)、④縦二・六
横×横一六・二種、⑤薄茶色表紙、⑥無郭、⑦外題―佐渡年
代記(原題簽あり)、内題・尾題・版心記―なし、⑧慶長(丙
申/十九年)／従大元(乙巳)至慶長五年庚子九百五十六年
(序文)、⑨「抽榮堂/山本氏/藏書印」(朱印)、⑩「新穂村
/羽田清」(紙片・万年筆書)、「佐渡年代記/嘉永四年辛亥
二十三冊」(紙片・墨書)、⑪漢字平仮名交じり文、墨(仮名・
句切点・上欄注)、朱(訂正・圈点・上欄注・右傍注)、角筆
(句切点・注示符)三三カ所、⑫一九九八年九月二十七日、菅谷
内教発見・調査

(2) 『撫筆小集』 ①全一冊、②江戸時代刊か、③袋綴装冊子

本(明朝綴)、④縦二七・二種×横一八・四種、⑤淡緑色表紙、
⑥単郭、⑦外題・内題―撫筆小集(原題簽あり)、尾題・版心
記―なし、⑧なし、⑨「山本恒/字子徳/号雪亭」「家住小/

蓮葉」(朱印)、⑩なし、⑪箏の譜、墨(歌詞・譜・濁点符)、朱(書入・訂正)、白(訂正)、角筆(譜・注示符・合点か)約一〇方所、⑫九八年九月二七日、山本寛発見・調査

(3)

『舊注蒙求』 ①全三冊、②江戸時代・文化十一年(一八一四)刊、③袋綴装冊子本(明朝綴)、④縦二六・四種×横一八・〇種、⑤薄茶色表紙、⑥単郭、⑦外題―舊注蒙求(原題簽あり)、内題―舊註蒙求、尾題―蒙求卷之下終、版心配―蒙求・考異下、⑧文化十一年甲戌首春人日/佐渡矢島望謹識、⑨「抽榮堂/山本氏/藏書印」「米亥」(朱印)、⑩「佐州五十里/勳風館出版」(表紙貼付紙片・墨書)、⑪訓点附刻(少数の片仮名・返点・合符・句切点)、角筆(片仮名・返点・合符・名詞符)約一二〇方所、⑫九八年九月二七日、鈴木恵・山本寛発見・調査、九九年一〇月二日、二〇〇五年八月四日、鈴木恵追加調査

(4)

『新撰大日本永代節用無盡蔵』 ①全二冊、②江戸時代・文久四年(一八六四)刊、③袋綴装冊子本(朝鮮綴)、④縦二六・〇種×横一八・二種、⑤黄色表紙、⑥単郭、⑦外題―新撰大日本永代節用無盡蔵(原題簽あり)、内題・尾題―なし、版心配―増字永代節用、⑧寛延三年庚午元刻/天保二年辛卯新刻/嘉永二年己酉再刻/文久四年甲子四刻(以下略)、⑨「抽榮堂/山本氏/藏書印」(朱印)、⑩なし、⑪辞書、訓点附刻(片仮名・平仮名・句切点・返点・上欄注)、角筆(片仮名・漢字・注示符・図絵中の補助線か)一三方所、⑫九八年九月二七日、鈴木恵発見、菅谷内致・山本寛調査

(5)

『赤穂義人録』 ①全一冊、②江戸時代・元禄一六年(一七〇三)以降刊か、③袋綴装冊子本(朝鮮綴)、④縦二七・二種×横一九・四種、⑤薄茶色表紙、⑥単郭、⑦外題・内題・尾題―赤穂義人録(原題簽あり)、版心配―なし、⑧日東元禄癸未十月庚辰鳩巢室直清手書/於静儉齋(序文)、⑨「佐州/美澤堂/新町」(黒印)、⑩「山本氏/恒蔵」(裏表紙見返・墨書)、⑪朱(句切点・右傍注)、角筆(句切線・右傍線)四方所、⑫九八年九月二七日、菅谷内致発見・調査

(6)

『箏曲大意抄』 ①全六冊、②江戸時代・寛政四年(一七九二)刊、③袋綴装冊子本(朝鮮綴)、④縦二七・二種×横一八・六種、⑤青綠色表紙、⑥単郭、⑦外題・内題―箏曲大意抄(原題簽あり)、尾題・版心配―なし、⑧「壬子新刻全部六冊」(刻字・第一冊扉上部)、⑨「抽榮堂/山本氏/藏書印」「雪亭」(朱印)、⑩「三宅多喜江」(墨書・第一冊1才余白)、⑪第一冊〜五冊―箏の譜、訓点附刻(上欄注)、第六冊―漢文体部分・訓点附刻(平仮名・片仮名・返点・合符、仮名文部分・訓点附刻なし)、角筆(譜・注示符か)約二〇方所、⑫九八年九月二七日、山本寛発見・調査

(7)

『東湖隨筆』 ①全二冊、②明治三年(一八七〇)刊、③袋綴装冊子本(明朝綴)、④縦一八・四種×横一二・四種、⑤黄色表紙、⑥単郭、⑦外題・内題・尾題・版心配―東湖隨筆(原題簽あり)、⑧明治三庚午歲三月新刻、⑨「靜古成/所蔵」(朱印)、⑩「明治三十二年己亥十一月/臼杵中齋君所贈/靜古書樓」(裏表紙見返・墨書)、⑪漢字片仮名交じり文、墨(書

入・訂正、角筆（注示符）三カ所、⑫九八年九月二七日、富澤綾児発見・調査

(8) 『諸役人分限摺』

①全一冊、②昭和五年（一九三〇）写、③袋綴装冊子本（仮綴）、④縦一〇・二種×横二四・四種、⑤白色表紙、⑥無郭、⑦外題―安政四己年／諸役人分限摺、内題・尾題・版心配―なし、⑧「昭和五年十月沢根町笹井収一氏／所蔵ヨリ稻邊萬ス」（墨書）、⑨「佐渡新／町山本／半蔵店」（朱印）、⑩なし、⑪役職・役人名簿、朱（書入・訂正）、角筆（圈点）三三カ所、⑫九八年九月二七日、富澤綾児発見・調査

(9) 『女用訓蒙圖彙』

①全二冊、②江戸時代刊か、③袋綴装冊子本（明朝綴）、④縦二四・八種×横一六・二種、⑤藍色表紙、⑥双郭、⑦外題・内題―女用訓蒙圖彙（原題簽あり）、尾題・版心配―なし、⑧なし、⑨なし、⑩なし、⑪漢字仮名交じり文、訓点附刻（仮名）、角筆（図絵の補助線）一カ所、⑫九八年九月二七日、鈴木惠発見・富澤綾児調査

(10) 『神社明細取調書』

①全一冊、②明治二八年（一八九九）写、③袋綴装冊子本（仮綴）、④縦二八・〇種×横一九・四種、⑤白色表紙、⑥双郭、⑦外題・尾題・版心配―なし、内題―神社明細取調書、⑧「明治二八年七月」（墨書）、⑨なし、⑩なし、⑪漢字片仮名交じり文、角筆（図絵の下絵線）四カ所、⑫九九年一〇月二日、富澤綾児発見・調査

(11) 『諸國序談 東遊記』

①全一冊、②寛政七年（一七九九）刊、③袋綴装冊子本（明朝綴）、④縦二二・二種×横一五・

〇種、⑤縹色表紙、⑥単郭、⑦外題―諸國序談 東遊記（原題簽あり）、内題・尾題・版心配―東遊記、⑧寛政七年卯八月（最終丁）、⑨「抽榮堂／山本氏／藏書印」「多田屋／貸本所／忠兵衛」「中木」（朱印）、⑩「石丸屋／宇兵衛（花押）」（最終丁・墨書）、⑪漢字交じり平仮名文、一部訓点附刻（平仮名・片仮名・返点・合符）、墨（絵図）、角筆（漢字）一カ所、⑫九九年一〇月二日、廣田さやか発見・調査

(12) 『請肄小言』

①全一冊、②明治一五年（一八八二）写、③袋綴装冊子本（明朝綴）、④縦二三・〇種×横一七・六種、⑤縹色表紙、⑥無郭、⑦外題・内題―請肄小言（題簽なし、墨書直書）、尾題・版心配―なし、⑧「明治拾三年九月卅日（成ル）／持主／山本三郎」（裏表紙見返・墨書）、⑨なし、⑩「明治三五初秋幾望／於鮎川学古堂」（墨書）、「山本」（赤フェルトペン）、「神武天皇即位紀元二千五百四十^{（明治）}年□／成ル／山本氏藏」（墨書）、「佐島 山本充子輝」（墨書）、⑪漢和辞典様、墨（片仮名）、朱（右傍点・注示符・圈点・閉線）、白（抹消）、角筆（注示符）三カ所、⑫九九年一〇月二日、富澤綾児発見・調査

(13) 『當流茶之湯流傳集』

①全一冊、②江戸時代刊か、③袋綴装冊子本（明朝綴）、④縦二二・六種×横一六・〇種、⑤茶色表紙、⑥単郭、⑦外題・内題―當流茶之湯流傳集（原題簽あり）、版心配―流傳、尾題―なし、⑧なし、⑨「抽榮堂」（朱印）、⑩なし、⑪漢字平仮名交じり文、訓点附刻（片仮名・句切点）、角筆（線）一カ所、⑫九九年一〇月二日、廣田さやか

発見・調査

なお、筆者は前稿において、山本半右衛門家発見の角筆文献に特筆される点は、その所蔵印や墨書書入、想定される購入年代や使用年代、書籍の内容などから、その何れもが、恐らく山本家の人物によって愛読・愛用されたと考えられる点と、角筆点の記入者をおおよそ特定することが可能である点と考えた。そして、もつとも多くの角筆による訓点が看取され、山本家第六世の子温が関係するものと目される『舊注蒙求』を取り上げ、訓点の内容について詳述した。その際、実例（写真）を掲げることができなかったため、ここに数例を挙げる。

○返点（レ点）・句切点・合符 上巻20才2

人臥禁中。

○返点（一、二点）・合符 上巻6ウ7

爲齊王。

○返点（一、二、三点） 上巻8才5

每有相思。

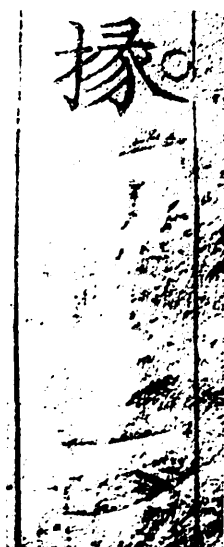
○仮名点（字音「ハン」）・合符 上巻8ウ2

楚反時。

○仮名点（字音「シ」） 上巻14才7

帶屣屣。

○仮名点 (字音「アン」) ※本来は「エン」 上巻31ウ9



○仮名 (和訓「ヲク (ル)」) 上巻19ウ6

簿 餉 魚

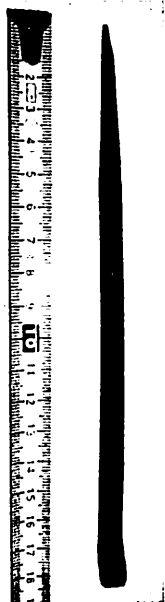
以上は仮名点 (和訓・字音)、返点、合符、句切点の例であるが、この他に漢字 (同音字注)、句切線などが看取された。

三 筆記具・字指 (角筆?) の発見

ところで、未だに数多くの角筆文献が発見され続けている新潟県において、残念ながら筆記具・角筆そのものが発見されたことは

これまでなかった。そうした中で、二〇〇五年九月一日、山本半右衛門家の現在のご当主・山本修巳氏より、八月一日頃、土蔵一階の (小間物などが入った) 木箱の中から角筆らしきものが見つかった。是非調べにきてほしいとのご連絡をいただいた。仮にこれを「角筆甲」とする。この調査・撮影は、九月一七日に行った。続いて一〇月三十一日に再び山本氏から、九月下旬に、やはり土蔵一階の筆記具等を置いてある付近にて、もう一本それらしきものが見つかったとの連絡があった。仮にこれを「角筆乙」とする。この調査・撮影は、同日 (一〇月三十一日) に行った。

まず角筆甲は材質は竹で、本体は一八・六種の長さであるが、七・五種ほどの分離した部分があって、本来は全長二六種ほどのものがあったが、それがいつしか二つに折れ、分離してしまったようである。先端から五種ほどの部分から最先端に向かって次第に細くなり、最先端部分の一種はさらに細く削ってある。折れた部分あたりに (竹の) 節があり、何故か付近がひどく焼け焦げている。これで火鉢などをつついたのではないかと推測された。



(角筆甲、本体部分)

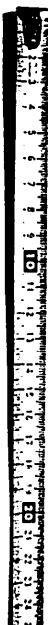


(角筆甲、
先端部分)

次に角筆乙は材質は木(黄楊か)で、全長二四・六糎である。元の部分は五糎×五糎の正方形、先端は二糎×三糎の長方形で、先端に向かつて次第に細くなるという変形四角柱である。その三つの側面に黒漆の加工が施され、残りの一面は、艶を帯びつつも木の素材のままである。



(角筆乙、全体)



(角筆乙、元部分)

角筆甲は極めて質素な作りであるが、最先端の形状から角筆として使用された可能性があるのに対して、角筆乙は高価な品物の如くであるものの、先端が尖っておらず、筆記の具として使用されることはなかったものと推察される。

この二点について、鳴門教育大学・原卓志、松山東雲女子大学・西村浩子の両氏に照会したところ、何れも「角筆」というよりも「字指・字突」ではないかとの見立てであった。

四 むすびにかえて

以上、山本半右衛門家・桂川文庫発見の角筆文献と字指について述べた。前稿の「むすび」において、「今後、子温の手に掛かる角筆文献を発見すべく調査を継続する一方で、墨や朱など通常の筆記具による子温の著作を見つけ出し、これを綿密に分析することも必要となるだろう。」と述べ、第六世の子温に関係する文献の発掘調査の必要性を説いたわけであるが、その後新たなネタマに基づく調査を行うこととなり、山本半右衛門家の調査は実施し得ていない。

山本半右衛門家の文献調査は、筆者による調査以外に、田中聡氏を中心とする新潟県立文書館のグループによって、筆者の調査と並行するような形で実施されたようである。当該調査については、田中聡「新潟県立文書館による山本家資料調査の概要」に詳しいのでそれに譲るが、一九九九年七月二二日に予備調査を行った後、二〇〇〇年一月一五〜一七日(一次調査)、一年一月二二〜二四日(二次調査)、二年一〇月二二〜二四日(三次調査)、同年一月一六〜一八日(四次調査)まで実施し、三年七月一日と同九年九月四日に

燻蒸の準備、九月八〜一〇日にかけて業者による燻蒸施工が行われた如くである。

県立文書館の調査(整理)によっても、資料毎に番号を付して整理するまでには至らなかったのは残念だが、歴代、親族・諸家、家伝、町・村、佐渡の大分類、当家年代記、十世半蔵(静古)、十一世修之助などの中分類が施され、総ての資料がその分類ごとに平箱に収納されることとなり、また「箱目録」も作成されたことによつて、今後の調査に格段の便宜が図られたことは間違いない。

ただ、すでに一通りの調査を実施した者にとつては、資料総ての配置が変わつてしまったこと、平箱に入れられたことによつて、結果的に外からは全く資料が見えなくなつてしまったことについては、相応の戸惑いがある。一刻も早い、資料一点一点に番号を付した「総合資料目録」の作成が望まれる。

〔注〕

- (1) 「山本半右衛門家の角筆文献について」(一九九九年六月)
- (2) 六資料に続く(7)(8)(9)文献もまた、同じ時期に広島大学名誉教授・小林芳規博士に鑑定・認定を依頼したものであるが、その折りは何れも「参考文献」とされた。今回改めて調書を確認したが、「角筆文献」と見て問題ないと判断した。
- (3) 『日本国語大辞典』第二版(小学館)によれば、「字指」は「初学の人などが読書する時、書中の文字をさすのに用いる木、竹または金属製の道具。字突き。角筆(かくひ)。」と説明されている。

- (4) 二〇〇五〜八年度科学研究費、基盤研究(C)「東北日本・日本海沿岸地域を対象とする角筆文献データベース作成に向けての基礎的研究」。この成果は、拙稿「東北日本・日本海沿岸地域の角筆文献管見」(『ことばとくら』第21号、二〇〇九年一月)に詳しい。

- (5) 『佐渡郷土文化』第105号(二〇〇四年六月)。なお、当時新潟県立文書館に勤務されていた田中氏は、現在長岡工業高等専門学校で教鞭を執られている。

〔附記〕

山本半右衛門家においては、調査の度毎にご当主山本修巳氏の多大なるご尽力とご協力をいただいた。深甚の謝意を表するものである。また、本調査には、新潟大学大学院教育学研究科ならびに教育学部学生(当時)、菅谷内教・山本寛・富澤綾児・廣田さやか氏の助力を得、科学研究費補助金の交付を受けることができた。改めて深謝申し上げる次第である。

なお、本稿は、注(4)拙稿中の山本半右衛門家調査に関する記述(特に文房具・角筆発見に関する部分)をご覧になった山本修巳氏から、二〇〇九年の暮れに執筆を依頼されたものであった。しかしその後、筆者は新潟大学教育学部附属新潟小学校長を兼職するなど多忙を極め、なかなかそれにお応えし、ご恩に報いることができないままとなつていた。御寛恕の程、切に願ひ申し上げます次第である。

—二〇一一年八月一日成稿—

(新潟大学教育学部教授)